



狙われた女子高生姉妹

腐蝕の失踪調査

草飼晃

挿絵／ジェントル佐々木

立ち読み版



Contents

目次

第一章	姉の失踪……………	4
第二章	揉まれる夏のセーラー服……………	62
第三章	パイズリ競泳水着……………	122
第四章	やくざ者の処女墮蹴り……………	179
第五章	倉庫の中の虜囚姉妹……………	243
エピソード	……………	284

登場人物

Characters

春菜 里深

(はるな さとみ)

三花学園の生徒会副会長を務める二年生。快活で明るい性格で好奇心も旺盛、行動力もあるのだが、時として歯止めがきかなくなる時も。突然の姉の失踪にいてもたってもいられず、行動を起こす。

春菜 友梨

(はるな ゆり)

生徒会長を務める三年生。里深の姉。正義感が強く、真面目な性格。しかし、それ故に融通のきかないところがある。とある不良生徒について調べていたところ、突如として行方不明になってしまう。

山岸

(やまぎし)

不良生徒。校内喫煙の常習犯。

種岡

(たねおか)

日頃から女子生徒の身体をいやらしい目で見ている中年体育教師。

醒井

(さめが い)

暴力団員の男。長身で鍛えられた身体つき。

「そんな。そんなこと。そんなこと言われたって、無理です——」

この時、校舎の方からベルの音が聞こえてきた。他のみんなはこれから普通に授業を受けるのだろう。それなのにわたしはこんなところでこんなことに。白日夢ではないのだ。聞き慣れたベルの音が今の友梨には現実を突きつけてくる非情な音となって届いていた。

重い痺れがつづく身体で懸命にもがく友梨。しかし種岡は体重と腕力と恫喝でその抵抗を押さえこみ、鳥肌を立たせる女子高生の股の間におのれの下半身を割りこませた。両手で左右の太ももをそれぞれ握りしめ、屹立した男性器の先っぽで、はしたなく露出させられた乙女の亀裂の上をグチグチと撫でてきた。

「だ……誰かあ、たすけて、ひい……っ」

「さわいだって、聞こえねえよ。もう午後の授業が始まったんだ。今日の午後はこのクラスも体育はねえし、グラウンドにはもう放課後まで誰も来ない」

まさか学園の中で強姦されるだなんて。こんな悪質な犯罪行為が行われるだなんて。友梨はこれまでそんなこと思ってもいなかった。学園の外の世界でなら残念ながらもそういうこともあるかもしれない。しかしここは教育の場。聖域ではないか。しかも。不審者が学園に入りこんで犯行に及ぶのではなく、教師が犯罪行為に出るだなんて！

信じられない！ ありえない！

だが今。その信じられないことが現実起こり、手つかずの花弁が、ピチピチの新鮮性器が、穢されようとしている。目の前の中年教師はそのありえないはずの事態の到来をこのころの底から喜んでいるようだ。

「おらおら、諦めろ。あんまりそうやって暴れると、制服の背中にマットのよごれがついて落ちなくなるぞ？ 後でみんなに怪しまれるぞ。いいのか？」

「せ……せ……先生が、まさかこんなけだものだっただなんて……っ」

熱い亀頭が強引に陰唇を割り、粘膜の上に直接触れてきた。膣口が探り当てられた。小陰唇がほぐれを見せていたのとは逆に、膣口はびつちりと口を閉ざしていた。カチカチに硬い亀頭の熱さに脅え、狭い入り口はいっそう小さくすぼまる。

無理だ、と友梨は思った。うぶな乙女の想像をはるかに超えている魁偉な男性器。友梨には自分のすぼまった膣口と比べてそれはあまりにも大きすぎると考えた。断言してもいいくらいだ。入るわけがない、と。

「ひ……ひ……こ、怖い……せ、先生……せ、せめて、せめてやさしく——っ」

その亀頭が半分、陰唇に隠れた。8の字形の括約筋が苦しげにきしみ、薄桃色をした膣口粘膜が強引に押し広げられる。引き裂かれるような衝撃でしなやかな肢体から

粘った汗が吹き出し、友梨の喉は「ひうッ」と空気のかたまりが何かに押しつぶされたような音を放つ。

「アレが効いてるんなら、身体が火照ってしようがないはずだぞ。最後まできちんと挿れて欲しいって言えよ、なあ、委員長ちゃん？」

「やつぱり、いや！ いや！ やさしくなんかされたくないし、先生なんて絶対いや。先生、重いし、臭いし……き、きたない。先生なんていや！ ダメ！ 絶対！」

ふだんであれば絶対に誰かに対して臭いなどはつきり言ったりはしない。だがこの時はさすがに、思春期の乙女の潔癖感がことばとなって洩れた。ところが、それを聞いた体育教師は怒るどころか、そうかそうかそんなにおれのことがいやなのか、と喜び出す。

「強情だな。さすが委員長ちゃんだ。だがなあ、口じゃそう言うがな、委員長ちゃん。身体はもうよだれ垂らして喜んでないか？ ああっ？」

（いやよ……いや！ わたし、将来……将来好きになった人と初めてを迎えたかったのに……こんなところで、こんな先生とだなんて……こんなのいやッ！）

中年教師は艶のあるロングヘアを振り乱していやがる女子高校生のむっちりとした太ももを掴み直し、そのもがきを封じてしまう。痺れに見舞われているとはいえ、両

腕が自由ならまだ抵抗のしようもあつたかもしれない。だが今の友梨はもう陵辱の牙の前になすすべもない状態だった。

先走りの汗に濡れ光る亀頭は膣口を正確に捉え、侵入を始めている。重い痺れや下腹部の疼きは感じていても、潤みは決定的に足りない。しかしそれにかまう素振りも見せずに、野獣教師の肉凶器は処女肉輪を内側から強引に押し広げにかかっている。

「せ……先生、わたしに、こ、これ以上のことしたら、わたし、先生に一生つきまといますよ！ 責任全部取って慰謝料払ってもらうまで毎日電話かけてドア叩きまくりますよ！ ドアにスプレーで落書きしますよ！ それでも、いいんですか——！」

「おお。ぜひそうしてくれや。委員長ちゃんにつきまとわれるんなら、男冥利につきるぜ。うへっへ」

以前新体操部の更衣室で女子部員たちが話していた「いざというときに男が怯むことば」も種岡には通じなかった。

「こんな場所でなんて……種岡先生とだなんて……っ……ひどすぎる……」

みし、みし、みし——とこじ開けられていく。お湯でふやけたミニ竹輪のような処女の膣肉輪が。

(うッうッうッ)

突然拡張させられて粘膜は引き攣つたように震え、まるで火傷をした直後のようにジンジンと痛みを発し始める。教師の体重が不快だった。教師の体臭も不快だった。下半身の衣服を脱ぎ捨てた教師のすね毛だらけの脚も不快だった。脂肪にまみれてたふたと波打っているメタボなお腹の波打ちも不快だった。

（ああ、いや！ こんな初めていやなのっ）

友梨の処女膣は持ち主の気持ちを反映してか、非常な頑なさを見せて挿入に抵抗していた。種岡も友梨同様、額や鼻の頭にこつてりと汗を浮かべ、眉を寄せ、歯を食い縛っている。なかなか一気に奥までは突き進められずにいるのだ。

野獣は腰を少し退いて勢いをつけようとしたり、身体をひねって角度を変えて、また突きこみ直してきたりする。そしてついに――。

むりむりむりっ。

ぴっちりとは硬く塞がっていた膣肉輪が内側から亀頭のかたちにむりむりつとふくらんで、雁の張りきつたところまでもがすつかり受け入れさせられた。と同時に硬い金屬やすりで擦られてでもいるかのような鋭い痛みに見舞われ出す。

「いや、先生……痛い、わたし。つらいんです、もう、ゆる、して」

下腹部を内側から太い肉の凶器で圧迫されて満足に口もきけない。一方種岡は硬く

勃起したままのペニスを、一度も男性経験のない高三女子の肉体の奥の奥にまで無理やりねじこもうとしてくる。

「るせえって。おれだって、痛いんだぜ。濡れが足りなかったかな……でもよ、委員長ちゃんのその必死そうな顔、苦しそうな顔、色っぽいぜ。テストで難問に取り組んでる時もそんな顔するのか、委員長ちゃん？ うへへ」

「も……もう、やめて、くださ、先生……こ、擦れて……熱くて、硬いもの、が」
視界が涙で覆われ、せせら笑う教師の顔が見えなくなってきた。脳の中が白っぽい蒸気みたいなもので満ちてきて、ものごとを考えられなくなってくる。

恐怖と脅えと緊張で収縮しきった膣道になおも亀頭は嵌まりこんできた。見た目の悪人だった体育教師は憐れな獲物の太ももをもう一度よっこいしょと抱え直し、乱暴なねじこみをまたあらためて再開させる。

大切な花芯を荒々しく踏み荒らされている女子高生は最後の抵抗とばかりに渾身の力をこめ、身体を自分の頭の方向へずり動かして逃れようとした。しかし実際にはほとんど身体は動いていなかった。こめていたその力を抜いてしまう瞬間に合わせ、種岡はさらに埋めこみを深くさせてきた！

一般的な処女よりも膣のかなり深いところを覆っていた友梨の処女肉ひだ。持ち主

である彼女もまじまじと観察したことはなかったが、友梨のそれは肉厚の多孔型だった。その、ひだ肉の弱い部分がまず、今度の強引な挿入に抗いきれなかった。

ぺち……ッ。ひだ肉の一部の裂ける音が確かに聞こえ、一拍の間も置かず、乙女の口からも悲痛な鳴き声が噴き出した。

「——いたあい……ッ！」

大粒の涙がこぼれ出し、友梨はそれ以上の苦悶は洩らすまいと歯を食い縛りながら、糸で引つ張られたようにその白いととのつたあごを天井に向けて晒していた。

「うお……たまらねえっ！」

篩状ふるいに穴を空けた処女ひだのより厚みのある部分が縦に裂けきるその前に、亀頭肉は処女ひだの一部を裂いた刺激だけで限界まで膨張し、駆け昇ってきたものを一気に吐き出させていた。どくつ、どくつ、どくつ。気持ちよさそうに目をつぶって種岡はおのれの劣欲の解放にその身を委ね、ぶる、ぶる、と腰を震わせる——。

「ちくしょう……バージンはひさしぶりだからな、出しちまった……バージン粘膜のやわらけえ感触で出しちまうだなんて、何年ぶりか……いや、初めてかもしれないが

膣口と肉棒の結合面から乙女の陰部の魚貝臭をしのぐ、腐った野菜みたいな匂いが漂い出す。処女ひだ肉の一部が裂けて出血もしているはずだったが、それをほるかに

上回る量の精液が放たれてしまったようだ。

(やだ……ねばねばした熱いものが。もし、こんな奴ので妊娠してしまったら)

それでもとにかくこれで陵辱は終わったんだ——そう思い、友梨は安堵しかけた。ところが種岡は抜き出そうとしなかった。肉棒も萎える気配は見せていないようだった。経験のまったくなかった友梨はなんとなく、男性というものは一回射精すればそれで自然にやめてくれるものだと思っていた。少なくとも友梨が保健体育で習った知識ではそんな印象があった。ところが。

「うへへへ……まだこれからだぜ。一回こぼしたくらいじゃ、やめないぜ」

豚のような肥満体を持った中年教師は陵辱を終わらせるどころか、女っぽく張り出した友梨の腰骨を押さえこみ、引き戻しかけていた。ペニスをふたたび強引に進めてきた。おぞましい野獣は自らの放った精液のぬめりも利用して無理やりねじこんでくる。十七歳の女子に対して相変わらず気遣いも遠慮も見せずに。

「ひいいい……こ、怖い、先生……わたし、こんな、乱暴な……ひいいい——ッ！」

哀願は途中からふたたび悲鳴に変わった。まだ裂けきれずに残っていた処女のひだ肉が数か所まとめて裂け始めた。肉を千切られる特有の痛みとともに、脂取り紙を破るような音が再度体内から聞こえた。

蓮根風に空いた経血穴と経血穴をつなぐ肉片部分が次々に裂けていく音だ。友梨のそこは持ち主の精神と同じように強靱で、人一倍厚みもあり、人一倍たくさんの神経が通っていた。それが凶器によって無惨に裂けていく。ぴりっ、ぴりっ、ぴちっ、と音を立てて。

「いたあいいい——ッ」

「さっきはこぼしちまったが、今度こそ頂いてやったぜ、委員長ちゃんの初めてをな。一生おれのこと、忘れられなくなつたら。ずいぶん痛がつてるよな？ 一回で一気に入ロストバージンできなかったか？ 処女膜二回破りになつたか？ おれに息を合わせようとしなからいけないんだぜ。おれはいつもはもつとやさしいのによ」

「ひどい……そんな……こんなひどいやり方をして。それなのに、つらいのはわたし、のせいだなんて……初めてだったのに……初めてだったのに！ わたし……せめて、やさしいことばを言って欲しかったのに……っ」

無論こんな男にやさしいことばをかけられたくないのだが、しかし。女ごころとしてはそうも思ってしまう。

苦しみが長引いたのは自分のせいではないだろう、と友梨は思う。挿入の途中で早々とこぼしてしまった挙げ句にふたたび強引に挿入してきた種岡のせいだ。相手が好き

でもなんでもない中年教師であるということからも、処女の喪い方からも、自分がひどい初体験を迎えた、というのには確か。

そして。そのひどい初体験は、まだつづいていた。

「わ、わたし……きちんと、おつき合いして、それから、好きな人と、迎えたかった、のに……っ、こんな、こんなじゃあなくて……っ」

「おいおい、委員長ちゃん。初めてにしちゃ、いい反応見せるじゃねえか？　なんだかおれのちんぽに吸いついてきてるぞ。うへへ。そんなにおれのが気持ちいいのか？　委員長ちゃんは入口もきつく狭いが、中の方まできつくできてるみてえだな。それで吸いついてくるみてえな感じ受けるのかな。てへへ。こいつはたまらねえ」

元のサイズに戻ろうとする膣肉を膨張した海綿体が強引に押し広げているのだ——。
(ひどい……わたし、こんなかたちで、清らかな身体じゃなくなっただなんて)

優秀な生徒会長にとつての性の初試練はまだ始まったばかりだった。中年の肉食獣は脈打つ肉槍を根元まで埋めこませ、本格的に腰を遣い始めた。ねっとり汗ばんだ中年男の肌と望まぬ火照りを帯びた乙女の肌が擦れ合い、粘膜と粘膜もまた密着し、湿った音を立て始めている。

「先生……わたし、先生を、一生……軽蔑します……絶対、許せな……い」

さつき飲んだんだろ？ だったら、すぐに痛みなんて吹き飛んで、気持ちよくなってるって。うへへ……おっおっ。そう、そう。今お前がっらそんな顔した時に、キューと絞ってきたぜ。いいなあ。友梨、もっとやってくれよ」

委員長ちゃんと呼んでいた種岡がここに来て急に名前呼び始めた。身体を繋げたのだからもう他人ではないとでも思っているのだろうか。

もつとやってくれと言われても、そもそも意識して何かができるわけがない。気持ちいいとか悪いとかという以前に、友梨としてはとにかくつらかった。

下腹部から串刺しにされて身動きが取れない。それにくわえて、もう純潔は戻ってこないのだという絶望感が、身体の重い痺れや手首を縛った粘着テープ以上に友梨から抵抗力を奪っていた。狭い腔内は膨張した肉棒でいっぱい満たされてしまい、内側からの圧迫で身動きもままならない感じ。

できることといったら後はもう、全身から苦悶の汗を流すことと、鼻腔から苦しげに息を洩らすことと、喉からくぐもつたうめきを洩らすことくらい。剥き出しにされた十七歳のお尻が湿り気を帯びた体操マットに悲しく擦れ、段ボールの表面に新品の消しゴムを擦りつけたような音が立つ。きゅ。きゅ。

「先生……乱暴すぎる……も、もう、動かさ、ない、で……」

「おおつ、友梨の奥、すごいじゃないか……」

ぐちゅ……。先ほどの精液なのか、それともほのかに鉄錆のような匂いを放っている破瓜の血液なのか。何かの粘液が密着した肉と肉の間から押し出されて音が重なる。

「ううんっ、痛い、先生痛い……壊れる、わたし、壊れちゃう」

「何言ってる、おれは気持ちいいぞ、友梨。当たってる当たってる。友梨の子宮口は高級肉みたいじゃないか。とろとろと肉汁に濡れてて、手応えがあってやわらかなんだ。ほら、当たってるの、お前もわかるだろ？ こつんって。ほら。うへへ」

（いやだ、奥まで……わ、わたし、本当に奪われてる……穢され、てる）

種岡がどすっ、どすっ、という感じで肥えた下腹部を乱暴に叩きつけてくる。すると確かに子宮のとは口がこつこつと突かれるのがわかる。

粘膜と肉棒の結合した部分から精液と血の混ざったものが少しずつととろとろと溢れ出ていた。それでもなお、艶やかな肌としなやかな腰を備えた十七歳女子の初々しい膣粘膜は痛みに後押しされて、締めつけと同じ反応を示していた。

気持ちとはまったく裏腹に、生殖器の底から何かむずむずした感じが湧き上がってきていた。子宮はふくらみ、さらなる射精を望むかのように膣の奥は勝手に広がり、それに呼応して膣口付近の膣壁が厚みと締めりを増していく。



「うへへへ。里深、お前はもう知ってるんじゃないのか？ ホットフルーツだよ。うへへ。すぐに効いてくるからな。委員長ちゃんのこと知りたかったら、このまま大人しくしてな。そうしたらこんなもん、すぐに外してやるからよ」

肥満体教師は里深の両足首にも素早く手錠を嵌めて逃亡を封じると、あわてた様子でドアに向かい、何やらひとりごとを言いながら内側から鍵をかける。

「この時間には誰も来ないはずだが、この前みたいにいきなり醒井さんに横取りされちゃかなわねえからな……」

次に戸棚に向かった。隠していたらしいビデオカメラと三脚を取り出し、里深に背中を向けて三脚を組み立て始めた。

(今のうちに)

「……くしゅんっ！」

里深はくしゃみをするふりをして、喉の奥に引っかかっていた錠剤を吐き出した。きのうの晩、もしかしたらこういう事態に陥るかもしれないと考え、ビタミン剤を使って飲みこんだふりをする練習をしておいたのだ。まさか本当に役に立つとは……。

錠剤を爪先で蹴り、実習機の陰に隠す。飲まなかったことはこれでばれないはず。

「言っとくがな、里深。おれだって別に毎日生徒を襲ってるわけじゃあねえんだから

な。里深がホットフルーツのことなんか嗅ぎつけるからいけねえんだぜ。自業自得つて奴だ。飛んで火に入るって奴だ。雉も鳴かずばつて奴だ」

ビデオカメラをセットし終わつた種岡は、今度は同じ戸棚の奥から透明プラスチック製の道具箱を出してまた戻ってきた。箱の中に見えるのは、歯ブラシ、羽根箒、筆。赤い枝のような物は——何かの触覚だろうか。そしてコードのついた楕円形の物。現物を見るのは生まれて初めてだったが、知識だけは一応あつたローター。

「うへへ。委員長ちゃんに使つてやろうと思つて用意しといたんだが、あの時はちよいと邪魔が入つちまつてな。今回が初使用だぞ、里深」

「邪魔が入つたつて、どういうこと……?」

「うへへ。里深がもうしばらく大人しくしてたら、教えてやるよ。もつとも、逃げたくても手錠嵌められてちゃ無理だろうがな。そのうちホットフルーツも効き出して、腰にも膝にも力が入らなくなるはずだしな。うへへ」

水着を煽情的に盛り上げるたわわな肉果実に粘ついた視線をそそぎながら、種岡が演説をつづける。

「あの時はよお、おれは委員長ちゃんのような大人っぽい美人ちゃんがタイプで、妹はじゃじゃ馬っぽいから、面倒臭そうだなんて言つたんだよ。だがな、本当言うとおよ、

里深のようなじゃじゃ馬を馴らすのも、面白いかもしれないねえよなあ。うへへ」

「せ……先生？ 何を」

「かわいがってやるぜ。里深。こんなにおっぱいばかり生意気に育ちやがって」

手足に手錠を嵌められて抵抗できない里深の脇腹を、種岡はじつくりとまさぐり始めた。少女の快樂のツボを探すかのように。時に指に力をこめ、時に力をゆるめて。少しづつ指圧のポイントをずらして。反応を確かめながらのねちっこい愛撫――。

「先生、さわらないで……！ 生徒にこんなことして、後で問題になってもいいの？ あたし、泣き寝入りなんか、しませんよっ」

「もう撮影も始まつてるんだぞ、里深。この映像、売りに出さず。ホットフルーツの常連客の男子生徒にな。後で問題になった時に有名になるのは里深の方だぞ。里深に情報流しやがったのが誰かは知らねえが、そいつも観ることになるんだぜ」

「え……そ、そんな……まさか」

駆け引きでも種岡の方が一枚うわ手のようだ。映像を公開すると脅しながら情報を得ようとしている。さらには十六歳の女子の身体のやわらかさと弾力も堪能しつつ。

「うへへへ。いい汗の匂いがしてきたぜ。感受性が強いのかな、里深は？ いくら即効性っていつても、さつき飲んだホットフルーツはまだ効いてないはずだぞ」

グローブのように大きな手がスリムな高二女子の身体の下に潜りこんで、ぷっくりとふくらんだ臀球を揉みにかかっていた。

（ひいっ……やだっ、山岸先輩にもさわられなかったところっ！）

さすがに里深は強い嫌悪感を覚えて身体を竦ませる。しかし繰り返してお尻を撫で回されるうちに十六歳の清らかな身体は内側から反応を掘り起こされ、興奮を掻き立てられてしまう。里深の鼻息はどんどん荒くなっていく。

尻肉から離れた指先が、うぶ毛を逆立てるようにうなじを滑る。不意打ちだった。もう一方の手は今度は腰を撫で回してくる。ひと撫でされるごとに、腰の芯のあたりで快樂物質がどばどばと分泌される感じだった。さらには粘膜が勝手に擦れ合い、愛液が迸り出て――。

「う……」

ぶちゅ、と水着の股をよごしてしまう。

（嘘。こんなばかな。きのう先輩に飲まれたホットフルーツの効き目はとっくに消えてるはずだし、さっきのは飲みこんでいないのに。なぜ濡れちゃうの、あたし？）

山岸に色々とさわられたのがきっかけで、自分は感じやすくなってしまったのだろうか。身体の中の何かが目覚めてしまったのだろうか。

(おっぱい、やだ!)

種岡の大きな手にも収まりきれないくらいの豊かさや丸みを誇る肉房も、とうとうまさぐられ始めた。乳肉はやわらかな弾力で指を撥ね返すが、種岡はこねるようにして指をめりこませてくる。

乳頭もすぐに反応し、痛いほどに勃ち上がってしまう。プールの水に濡れてまだ乾ききっていない水着繊維の裏側に擦れ、甘いむず痒さが胸肉に流れこんでくる。

「は……恥知らず。教師が、高校生の女子にこんなことして、何が楽しいのよっ!」

「うへへ。楽しいに決まってるじゃねえか。おれが体育を担当してる二年生の中でも、断トツのふるんぷるんおっぱいなんだぜ、里深。それによ、さっきも言ったよな。里深みたいなじゃじゃ馬が屈服するところを、おれは見てえんだよ」

「く……屈服なんて、しないんだから、あたし……あ、ああっ!」

親指とひとさし指となか指で、やや上向き加減の乳首をつままれる。ブルーの競泳水着の繊維がびったりと張りつき、乳輪のふくらみから乳頭のかたちまでもがはつきりと浮かび上がっていたのだ。

乳突起が三本の指に揉み回され、コリコリとしごかれる。かと思うと初めてリモコンに興味を持った幼児の指に押されるボタンのように、くにつ、くにつ、と真上か

らやさしく押し潰される。

（ああ……そんな、こと、しないで……せ、背中の方までぞくぞくしちゃう……）

今度は手のひらがべったりと胸のふくらみに覆いかぶさってきた。粘土細工でもしているかのようにむにむにと揉まれる。乱暴に圧迫されても痛みは感じなくなっていた。それどころか刺激を受けたことで、乳肉は張りりと弾力をいっそう増していく……。「うへへ。すげえなあさすがに。新品のゴム毬みてえだな。やわらかくって、ムチムチ感も見た目以上で。水着越しだからよけいそうなのかな、重たさもたまらねえぜ」水着の生地の内側でかたちを変える乳肉の感触を指で愉しむ野獣教師。

（どうして。あたし、こんな先生にさわられて反応しちゃうのよ……っ！）

山岸の愛撫よりも数倍執拗だった。と同時に数倍女体の反応を熟知しているような揉み方だった。ニプルはますます硬さを増してしまい、感度も鋭くなっていく。胴体によじらせて手から逃れようとしても、手足の手錠のせいではほとんど動けない。

（で……でも、ここは学園の中だしっ。いくら生物教室が校舎の端のひと気のないところにあるとはいっても、あたしが本気で絶叫すれば。誰かに声は届くはず！）

だが種岡の次のひとことで、むちむちした肉体を水着の中に詰めこんだ黒髪少女は救いを求めるさげび声を上げるのを思いとどまってしまふ。

「委員長ちゃん胸より、大きいよな。うへへ。でかいと揉み心地もいいしな」

「姉さんの胸って……先生、ほんとに体育倉庫で姉さんを襲ったの？ 先生、今姉さんはどこなの？ あたしに、さ、さわつても、いいから……教えてください」

「ほう、そうかい。じゃあ里深がもう少しおれを楽しませてくれたら、委員長ちゃんのことを話してやろうかな。重大な情報を一円も払わずに教えてもらえるなんて、里深はラッキーなんだぞ。うへへ。でっかいおっぱいしていると色々得だな、里深」

（卑劣な奴……で、でも、姉さんの手懸かりがもう少しで掴めそうなんだから……せつかくここまでたどり着いたんだから。こいつに姉さんのことをしゃべらせるまでは我慢した方が、いいかも……口さえ塞がれなきゃ、大声はいつでも出せるんだから）
耐える構えに入った水着少女を見下ろしながら、種岡は実習机に手を伸ばし――。

ハサミを持った。

「先生……ハサミなんかで、な……何を……？」

「うへへ。せつかくのでっかいおっぱいなんぞでな。前々からやってみたかったんだ」
「そんなつ。やだあ……っ！」

Eカップ乳の谷間部分の真上にハサミの刃があてがわれた。悲鳴が大きくなると、肥満体教師は里深の眼前に光るステンレススチールの刃をかざして脅してくる。

「なあ里深。髪の毛をザクザク切られたいか？ 顔に傷つけられたいか？ そんなのいやだろ？ だったらもう少し大人しくしてな。うへへ」

「やだったら。やめて、先生……っ」

懇願は無視され、水着の胸の部分が楕円形に切り取られてしまった。現れたのは、薄く静脈を透かせる二つのおっぱいによってつくり出された悩ましい深い谷間。体育教師は音を立てて生唾を飲みこむ。

「うへへ。体育の時間、いつも思ってたんだ。一回やってみてえってな」

荒い鼻息とともに種岡がトレパンと下着を脱ぎ捨て、肉棒が剥き出しになった。脚も下腹部も陽に灼けてはいないのに、性器だけなぜかどす黒い。初めて目の当たりにした男性器のグロテスクな姿に里深の体温はすつと下がり、鳥肌が立つ。

「やだっ。そ、そんなもの、見たくないっ」

這いずつてもでも逃れようともがいたが、黒髪を掴まれて身動きを阻止された。種岡は里深の上に覆いかぶさって体重を加えながら、重量感あふれる八十六センチ乳房の谷間にペニスをあてがおうとする。肩や胴を揺さぶって抵抗すると、いいから大人しくしてろとばかりに平手打ちを見舞われた。

「委員長ちゃんもそうだったな。いざって時になると本気で暴れ出しやがるな」

「ね……姉さんにも……同じことを、したの……？」

「もう少し大人しくしてりゃあ、全部教えてやるって言ってるだろう」

種岡は一瞬やんだ女子高生の抵抗を逃さなかった。Eカップの胸肉と胸肉の深い谷間に強引に、握り拳のように硬くなった亀頭が入りこんできた。無垢な処女にとつてはあまりにも異様な行為だ。毛ざらいしていた中年教師の不潔そうな男性器にじかに触れられるその汚辱感といったら——。

「やだあ。気持ち悪い」

「げへへへ。里深の生おっぱいの感触、すげえ。練絹みてえじゃねえか」

真ん丸い果実のような二つの胸肉は、左右とも半分ほどが楕円の穴から露出している。薄青く血管を透かせた白い無垢なふくらみは細い首すじや引き締まった胴との対比でよりポリリウム豊かに見える、それが野獣をより興奮させてしまっているようだ。

「でけえよなあ、里深の胸。いいよなあ、女子高生って。こんなもぎ立ててみてえなおっぱい持つててよお。おれも生まれ変わる時は女子高生になりてえぜ」

谷間に亀頭を挿入されているだけではない。教師の手はGカップの水蜜桃を左右から驚掴みにしてぐにゅぐにゅと力をこめてくる。粘ついた眼差しも相変わらなずだ。

「里深のおっぱいの純情な熱で、おれのちんぽや手のひらがヤケドしそうだぜ」

「やあ。も、揉まないで。せ、先生。腰も、動かさないで……」

にちゃ、にちゃ、にちゃ。いやらしく往復し始めた肉凶器によって乳肌をペニスで擦られる。一度も経験したことのないおぞましい感触だった。しかし肉体はこころとは別の反応を示した。異臭を放つ亀頭肉に摩擦を繰り返されるうちに豊かな肉房の奥に甘美な味が生まれ、切なさみたいなのがひりひりとこみ上がってくる。

「敏感なんだな、里深」

ちりちり頭の体育教師がうれしそうに言う。女子の体温とやわらかさに満ちた乳脂肪で勃起を包みこまれて、もうしあわせで仕方ない、といった表情を見せながら。

（くやしい……こんな卑怯な奴に……あたしは姉さんのことを聞き出したいだけなのに！ 反応なんかしたくないのに！）

里深はくちびるを噛みしめて自分を抑えようとする。感じやすい少女の身体は、胸を揉まれたり乳頭をつままれたりしてもすぐに反応してしまう。きのうの山岸の時もそうだった。けれどあれはあくまでも手や指で愛撫されたること。

まさか自分のおっぱいが、男性器に擦られてもこんなに反応しちゃうだなんて！

「やめて。やめてよお……ううっ、ううっん」

しかし持ち主の気持ちを無視して、十代の清廉な肉体はますます昂っていく。たわ

わな豊乳の谷間が先走りの汁と乳肌の搔いた汗の混ざり合ったものでべとべとになる頃には、里深はすすり泣きながらも濃い愉悅を含んだあえぎを口にしていた。

「へへ。谷間だけじゃあつまらねえ。すげえおっぱいだもんな。見せてもらうぜ！」
楕円形の開口部をグイッと広げられ、それまで合成繊維に半分押さえこまれていた八十六センチのやわらかな乳果実が、とうとう中年体育教師の目の前で完全に露出した。ぷるるんと弾み出たおっぱいを覆うものはや何もなく、砲弾型の豊乳ぶりがあますところなく中年教師の前に曝け出されている。

よく熟れたプリンスメロンが二つ仲よく前方に向かって突き出したかのような見事さ。やわらかそうで、それでいて張りのよさも量感の豊かさも誇っている。持ち主が身をよじるたびに瑞々しく揺れるが、それでもかたちは崩れず、深い谷間も維持したまま。肉房の二つの頂点ではここまでに受けた刺激だけで、桃色乳首がむくむくと勃ち上がっているし、大きめの硬貨みたいな乳輪もぷっくらと漲りきってしまっている。

「やだ、先生、もうやめて……ッ」

哀願は無視された。下品さと好色さを露わにした体育教師は腰をゆるゆると動かし、密着したままでの摩擦を愉しみつつける。十六歳の初々しいEカップ乳は本人の意志に逆らい、好きでもなんでもない中年教師の抽送にソフトな弾力を返してしまう。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>